

## 批評・紹介

George Bryan Souza

### *The Survival of Empire: Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea, 1630—1754*

菅谷成子

本書は、著者の言によると、一九八一年にケムブリッジ大學に提出した博士論文「Portuguese Trade and Society in China and the South China Sea, c. 1630—1754」をもとに加筆補訂を行なったものである。ヨーロッパの擴張(Expansion of Europe)に関する研究の一分野という角度から、アジアにおけるポルトガル海上帝國的支配の本質とその存続の實態を、その一據點であったマカオのポルトガル人の貿易活動に焦點を當てて説明しようとしたものである。時代的には、アジアの商業貿易界へのヨーロッパ勢力の進出という點に目をむけると、中東のキャラバン香料貿易ルートがケーブ香料貿易ルートに壓倒され、ポルトガルの「再分配企業體」方式によるアジアにおける貿易支配體制が、イギリスやオランダの會社組織による貿易活動に敗北していった時期である。ポルトガル領マカオの歴史という視點からみると、本書で扱っているのはマカオが自治權を保有しつつも、治外法權を喪失しほぼ中國に併合された時期までである。従来、積極的に取り上げられることの少なかったこの

時期のポルトガル人のアジア地域内の民間貿易活動を、オランダ人やイギリス人がアジアにおいて勢力を伸張していく過程との関連において捉え、前者のアジア貿易に占めた位置を積極的に評價しようとしている。マカオのポルトガル人が、日本貿易の喪失やマラッカの陥落に象徴されるオランダの脅威の増大、マニラとの一時斷交、中國においては明清交替期の混亂に巻き込まれるという存亡の危機を乗り越え、どのように新しい状況に對處していったのか。すなわち、本書においては、ポルトガルのアジア支配を「再分配企業體」を維持しつつけた王室側の視點ではなく、アジア各地の據點に居住し貿易活動に従事した「民間」ポルトガル人にとって、それがどういう意味を持っていたかを検討することにより、その本質を説明することを意圖している。

評者は本著者について詳しく知らないが、著者は、スタンフォード大學に學部生として在學中の一九七一年からポルトガルの植民史の研究に手を染めたということである。それ以來、ポルトガル語史料はもとより、スペイン語、英語、オランダ語などの関連史料を廣く各地の文書館に求めている。本書の特色となるのは、従来、ポルトガル人のアジアにおける海上活動を説明する際にほとんど用いられなかったハーグのオランダ國立文書館所蔵のオランダ連合東インド會社(VOC)の史料を、ポルトガル語史料などを補充するものとして積極的に利用することにより、新事實を明らかにしてこの分野の研究に新たな分析の素材と可能性を打ち出していることである。本書において用いられた未刊行の一次史料などの各古文書館における所藏状況やその内容については、巻末にまとめられた注と文獻目錄のあいだに「一次史料」と題してポルトガル、インド、スベ

ン、オランダ、イギリスの各文書館の見出しのもとに概説されている。オランダ語史料については、別に著者による、“Notes on the *Algemeen Rijkarchief* and Its Importance for the Study of Portuguese Asian and Inter-Asian Maritime Trade.” *Itinerario*, vol. 4 (1980), no. 2, pp. 51—56. がある。さて本書は序文および十章から成っているが、上述した文献目録などに加えて巻頭には簡便な語彙解説、通貨および度量衡の換算一覧がついており便利である。それでは、とりあえず本書の内容について参考までに目次を紹介することにしたい。なお、“country trader”は「カントリトリーダー」として敢えて譯出しなかった。

## 第一章 アジアにおける海上貿易

## 第二章 帝国の基礎——インディア領 (Estado da India) と

カオ——

## 第三章 人口、人物および自治體の権限

## 第四章 カントリトリーダーと王室獨占

## 第五章 商人と市場

## 第六章 カントリトリーダーと市場の開拓

## 第七章 帝国内諸關係——マカオとインディア領——

## 第八章 帝國の存續——明朝から清朝期にかけての中國—ポルト

ガル關係——

## 第九章 マカオ、會社およびカントリトリーダー——中國におけ

る他のヨーロッパ人——

## 第十章 結び

以下その内容の概略を紹介することにしたい。これは、本書で扱っている主題に關する研究書が、比較的乏しい現状から無駄なことではないと思われる。

第一章は序論ともいふべきものでポルトガルが進出した當時のアジアにおける既存の貿易網を中國を中心とした貿易世界と東南アジア——本書においては「南シナ海 (South China Sea)」——の貿易世界に分けて概観している。「南シナ海」という語の使用は、プーデルの「地中海世界」の概念を念頭において、ポルトガル商人はアジア商人と共に東南アジア各地を結び附ける役割を果たすことによつて、その貿易世界を構成する一つの要素であつたとの認識によると思われる。

第二章においては、ゴアを中心に海岸線上に築かれた一連の要塞、艦隊の配備および植民據點から成るインディア領の性格、一六世紀から一七世紀早期における島嶼部東南アジアの各地域とポルトガル香料貿易獨占策との關係、ポルトガル領マカオの成立、マカオにおけるポルトガルの行政制度の導入——カピタン・モル制、マカオ長官 (*capitão-geral*) の権限、*administradores da viagem de Japão e Manila*、司法制度、財政、教會保護權、市參事會の創設とその権限および機能、慈善團體——サンタ・カザ・ダ・ミゼリコルディアの機能について説明されている。

第三章では、マカオの人口および人的構成要素について概観しているが、ゴアの場合と比較してマカオにおける特徴的な現象は、アジア域内貿易に従事していた主たる人的要素がほぼカサド (*casado*) に限られていたことである。さらにカサドの中で、マカオの市參事會などにおいて政治的・經濟的影響力を持っていたの

は、本國生まれのポルトガル人 (Heinlo) であった。これらの人々が、主にアジア域内貿易活動に従事し、次第に不利になっていく環境条件のなかで貿易を繼續することによって、ポルトガル領インドニアとしてのマカオの存亡の危機を切りぬけ、その存続を支えたのである。また現存史料によって、その活動が比較的明らかになる三人の *Heinlo* を實例に取り上げて、マカオにおけるポルトガル人の活動の一端を明らかにしている。

以上、第三章までが、廣い意味で本書の主題の導入部であるといえよう。

第四章においては、マカオの初期の繁榮を築くもとなつた對日本貿易とマニラ貿易について述べている。日本貿易の繁榮は倭寇の跳梁による明の海禁政策の實施中にポルトガル人が中國—日本貿易の仲介者としての地位を築いたことによる。中國からの主要な輸入品は、生糸、金であった。しかし、ポルトガル人による中國産の金の輸入は、一六二〇年代になると減少したが、これは收益の點からインド方面へ輸出されたためである。日本からの主要な輸出品は銀と銅であった。ポルトガル人による銀の輸出は一六三五年ころ以降急速に増大したが、これは御朱印船貿易の禁止、マニラにおけるメキシコ銀の入手困難や、*VOCO* に對する防衛費の増大などと關係がある。なお、著者は、從來のこの時期の日本銀の總輸出額の推計値には疑問を呈している。ところで、ポルトガル人は日本貿易において、日本からも資本を調達していたが、糸割符制度の施行などによる利潤率の低下などもあり、一六三〇年までには、日本人に對してポルトガル人は藥積債務を抱えるようになった。そこで、糸割符の對象となる白糸以外の生糸または絹製品を大量に輸入して收益をあげ

る策を用いた。また、從來の日本人に代わって、廣東の中國商人から資本を調達するようになった。マカオのポルトガル人は、公式には禁じられていたが、直接的または間接的にマニラ貿易に従事して利益をあげたが、それと同時に、マカオの利益を擁護するため、スペイン人の廣東貿易進出の試みを挫くのに努力した。一七世紀早期のマカオ—マニラ貿易で特徴的な貿易品は、中國からの水銀であった。これは、ガレオン船によってメキシコに運ばれ、銀の精錬に使用された。マニラでポルトガル人の入手した銀はマラッカに齎られインド綿布の購入に使用されたが、最終的にはコショウや香料の入手に繋がっていた。マニラにポルトガル人の手により齎らされた主なものは、硝石、火藥などの軍需品、インド綿布、奴隸、香料などであった。なお、マニラは中繼貿易港として廣くインド・東南アジア各地の市場と結び附いていたため、ここでは、マカオのポルトガル人の活動に限定せず記述がなされている。また、マカオのマニラとの直接貿易は一六三〇年代まで擴張し續けたが、これは、オランダの臺灣進出に關連して航海の危険が増加したため中國船のマニラ來航数が減少したことにもよる。すなわち、ポルトガル船を利用して取引を行なう廣東商人が増加した。しかし、一五八〇年以來、スペインに併合されていたポルトガルが、一六四〇年に蜂起して再獨立を達成した報がアジアに到着するや、ポルトガル人によるマニラ貿易は中斷された。また、著者はこの章で、マニラ經由で中國に齎らされたメキシコ銀の總額と日本からのその從來から提唱されている推計値とを比較検討して、從來の推計値が大きすぎるのではないかと疑問を提出している。

第五章においては、マカオのポルトガル人が、日本の御朱印船

貿易や中國人の南洋貿易に刺激を受け、東南アジア各地との貿易に本格的に乗り出した状況を地域ごとに述べている。マカオは一六三九年の日本貿易の喪失および四一年のマラッカ陥落などにより従來の主要貿易市場を失った。インドネシア海域における $\angle$ 〇〇の貿易の支配が進展したことはポルトガル人の活動範圍を規定する重要な要素であった。一七世紀早期のマカッサルの興隆は、ポルトガルのモルッカ諸島からの追放と關連して香料貿易を含めたアジア域内貿易の中繼貿易港としてアジアやヨーロッパの商人をひきつけたことによる。ポルトガルは $\angle$ 〇〇の香料貿易獨占體制の成立を阻止すべく、マカッサルの勢力擴大を支援し、兩者は概ね相互依存の關係にあった。主な貿易品には、コショウ、クロープ、銀、金、インド産綿布、生糸、絹織物、鐵などがあつた。またマカッサルを介したポルトガル人のマニラ貿易は、後者のメキシコ銀の獲得に重要な役割を果たした。また、小スンダ列島でのサンダルウッド貿易も繁榮した。ポルトガルとマカッサルの友好關係は、 $\angle$ 〇〇にとつて脅威となつたが、一六五三―五五年のマカッサル・オランダ戰爭を経て、六〇年にはマカッサルのポルトガル人はオランダ人の攻撃を受けた。さらに六七年度の $\angle$ 〇〇によるマカッサルの征服はポルトガル人の同地との貿易を壊滅させた。マカオのポルトガル人によるトンキン貿易は、當初日本貿易向けの生糸の入手が主眼であつた。トンキンとの貿易は、ポルトガルが日本貿易から撤退した後も繼續されたが、特に中國銅錢の輸出によつて利益を得ることとなつた。一六六〇年代に入り、 $\angle$ 〇〇や中國人が大量の銅錢を齎らすようになったため、ポルトガル人の利潤は減少し、この貿易は衰退した。バンタムにおいてはヨーロッパやアジアの商人に對して市場を開放していた

ので、マカオのポルトガル人も、一六七〇年代において定期的に貿易を行なつた。貿易品としては、中國向けにコショウ、鹽、アレカナツツ、銀があり、中國からは生糸や絹織物、金、鉛、陶磁器、茶などが輸出された。しかし、バンタムは一六八二年には $\angle$ 〇〇の影響下におかれることとなり、イギリスなどの外國商人とともにポルトガル人も貿易活動から締め出された。なお、ここで注目すべきことは、イギリス勢力などによるヨーロッパ向けの茶貿易が本格化する以前にポルトガル人がいち早くアジアにおいて茶貿易に従事していたことである。

第六章では一七世紀後半以降、マカオのポルトガル人が、オランダの貿易支配の間隙を求めて、東南アジアにおいて新たな市場を開拓する努力を重ねたことを跡付けている。また、これらのポルトガル人は、清朝の基礎が定まるに従つて、従來の活況を取り戻した中國人による帆船貿易とも對抗しなければならなかつた。その一つの試みとして取り上げられたのは、一六七〇年代中ごろから約二〇年間にわたつて繼續されたバンジャルマシンの中國むけコショウ貿易であつた。しかし、ポルトガル王室がコショウ貿易を獨占しようとしたところ、バンジャルマシンのスルトタンはポルトガル人のコショウ積込みを拒否したためこの貿易は放棄された。この時期以降、急速にマカオのポルトガル人にとつて重要性が増したのは $\angle$ 〇〇支配下のバタヴィアであつた。その當時、オランダ人は中國との直接貿易を一時的に諦めて、ヨーロッパにおいて需要の高まっていた茶などの中國物産の供給はバタヴィアに來航するポルトガルや中國商人に仰ぎ、中國むけのコショウや鉛、錫をこれらに賣り渡す方針を採つていた。また、廣東の中國商人はバタヴィアむけの商品の輸送に

中國帆船のみならず、ポルトガル船をも利用していた。一八世紀に入り約十年にわたって清朝が中國人の南洋渡航を禁止したことは、廣東の中國商人のバタヴィア貿易におけるポルトガル船への依存を深め、ポルトガルのこの地域での貿易に生氣を與えマカオの國際貿易上の地位が上昇した。しかし、南洋渡航禁止の解除とともに、廈門などからの中國帆船による貿易が再び盛んとなり、またオランダも中國と直接取引する方針に轉じたため、一七三〇年代以降この貿易活動は減退する傾向になった。ところで、上述のバタヴィア貿易で注目されてよいことは、マカオや廣東との結び付きが從來考えられていたより重要であったことである。また、ポルトガルやスペイン人を介したマニラとのシナモン貿易はオランダにとつて重要なメキシコ銀の供給源ともなった。一七三〇年代以降、マカオのポルトガル商人は、バタヴィアやチモールなどの東南アジアでの貿易事情の悪化から、それに代替する新たな市場を求めて本格的にマラバル海岸に進出していった。貿易品はいわゆるパラストといわれるものが主であったが、具體的には、マラバル海岸において需要の高かった砂糖を中國から持ち來たり、コショウやサンダルウッドなどを買ひ付けるというパターンを基本としていた。ここにおいても、マカオのポルトガル商人は、ゴアにおけるポルトガル王室や $\text{COC}$ の貿易支配を巧みに切り抜ける一方、現地勢力との間に協力關係を築いて民間貿易を行ない、マカオの經濟を支えその命脈を保った。しかし、マカオのポルトガル人がインド西海岸の貿易に進出したことは、イギリス東インド會社の活動などとの衝突の機會の増加を意味するものでもあった。

第七章においては、アジアにおけるインディア領内、特に王室の

利害を代表するゴアの副王やゴアの民間商業界とマカオの軋轢について具體的な例を擧げて述べている。マカオの貿易活動は王室の貿易支配制度と民間ポルトガル人との拮抗關係に特徴づけられていた。マカオのポルトガル人は自身の利害を擁護する手段として、集團としては市參事會を利用する一方、個人的には王室役人などとの私的な交渉によつて有利な取引條件をひきだした。ところでポルトガルのアジアにおける貿易活動は、當初大型の船により行なわれていたが、一六一八年以降、徐々により小型の船が用いられるようになった。これは貿易船の難破による損害、オランダ船などによるポルトガル船の捕獲やその他海賊活動による被害などを軽減するためであった。またインディア領の増大する防衛費の負擔をめぐつて、マカオのポルトガル人と王室の利害は對立しがちであった。一八世紀の早期からマカオの民間貿易船は、東南アジアにおける市場の喪失を相殺するために、利潤率の低いゴアでの貿易を避けてスーラトとの貿易に乗り出した。しかしゴアの副王は、マカオのスーラト貿易がゴアのスーラト貿易と競合するとともにインディア領を支える關稅收入の減少を齎らすものと結論した。そこで、マカオの貿易船を強制的にゴアに寄港せしめて關稅を納めさせる一方、それがスーラトと貿易することを禁止した。その他、マカオの貿易商人と王室の利害の對立の例としては、マカオへの王室貿易船の派遣や、マカオのポルトガル商人が従事していたサンダルウッドを中心とした利潤の大きいチモール貿易を、一七世紀の終わりごろから王室による獨占としたことがある。ところで、マカオのポルトガル商人の貿易活動は、個人的な資金の他に主にカザ・ダ・ミゼリコルディアからの貸し付けに多くを依つていた。カザは主に寄付と財産の遺贈によ

つて得られた資金を運用することを基礎に經營されていた。その限られた資金の貸し付け先をめぐって、王室側の代表である役人と民間のポルトガル人を代表する市参事會の間にしばしば對立がみられた。しかし、この資金も一八世紀に入ると放漫な資金の運用などによって枯渇するようになり、カザの本來の設立目的であった、慈善活動にも支障を來す状態となった。ポルトガル王室はその財政状態を改善するため、カザに對してマカオの民間貿易への投資を制限するなどの対策を命じた。しかし、カザの運営に加わっていたのが、民間貿易に攜わっていたマカオの有力ポルトガル人であったため、命令は無視されがちであった。また、當時國王の教會保護權のもとでマカオに本據をおいて布教活動を獨占していたイエズス會の日本管區は、それ自身日本貿易に従事するなどしてその活動資金を調達した他、カザと同様にマカオのポルトガル商人に貿易資金を貸し付けるなどもした。また、インドにおける不動産所有からあがる地代などの送金によってもその活動を支えていた。イエズス會はその資金の運用をめぐって、赤字に悩まされていたマカオの財政状態を反映して市参事會と對立することが多かったが、一七六二年の追放までマカオの政治・經濟に一定の貢獻をしていたといえる。

第八章は、明清の交替期以降一八世紀の半ばまでの中國とマカオのポルトガル人との關係を、中國の海外貿易を取り巻く環境の變化に伴う中國官憲の海外貿易に對する態度の變遷とポルトガル人のそれへの對應を中心にしてゐる。先ず、一六二〇年代にいたるまでに、マカオのポルトガル人の貿易活動に對する中國官憲による統制が次第に厳しくなるとともに權力の濫用などが増加し、明朝とポルトガル人の關係が悪化した事情を述べてゐる。明清交替期の混亂によつ

て、マカオのポルトガル人の貿易活動は苦況に立つたが、その後回復し、清朝側とも、船鈔などの海關稅の引き下げなどをめぐってある一定の良好な關係を築くことができた。しかし、ヨーロッパ商人の廣東などにおける中國貿易が盛んになるにつれて、清朝側の外國貿易に對する統制が強化されることとなり、いわゆる廣東一三行といわれる廣東貿易制度が確立した。その過程で、マカオでは、ポルトガル人の自治權は存続したが治外法權は廢止され、一七五四年までにはほぼ中國領の様相を呈することとなった。なお、この章において強調されているのは、北京での中國との關係を改善するための外交努力や廣東の中國官憲や商人との複雑な相互依存關係を保ちながら、マカオの存続をはかるポルトガル人の態度である。

第九章は、これまでの章において述べられてきたこと、すなわち、會社組織とその軍事力を利用してアジアにおけるポルトガルの貿易支配制度を蠶食しながら、勢力を擴大するオランダやイギリス商人などとマカオのポルトガル人との對抗關係を、前者の中國貿易への進出過程における後者との間の軋轢という觀點からとらえなおしてみたもの。この生存競争のなかで、清朝官僚との良好な關係を保つ外交努力を繼續しつつ、マカオのポルトガル商人は次第に厳しくなつていく情勢に臨機應變に對處し、マカオにおけるポルトガル人社會を存続させた。すなわち、必要とあらば可能な限り讓歩するなどしてオランダ、イギリスなどのヨーロッパ商人、中國人を始めとしたアジア商人などと商業關係を繼續することによつて活路を見出したのである。

第十章はまとめ。

以上、その内容の概略を紹介した。評者は本書の研究對象および

その據つてたところのポルトガル・オランダ語史料などについて専門的な知識を持ち合わせていない。能力に餘る書評をお引き受けしてしまい、本書の重要な論点を正確に捉え得たかについては、甚だ心許なく恣意的な内容紹介となったのではないかと危惧する。評者の力量では、膨大な一次史料に基づいて詳細に検討された結果ともいえる本書の内容についての確に論評することはとてもできない。若干の感想を述べることで取り敢えず本書紹介の責めを塞ぐことをお許し願いたい。

本書において評者が氣になるのは研究対象となる時期の設定、一六三〇—一七五四年についてである。これは研究史料の収集など都合上、便宜的に採られたものかもしれないが著者の時期設定に對する見解は明示されていない。本書の意圖からある程度は納得できるが通讀してその記述に従うかぎり、特にその始期については、あまり積極的な意義が見出せない。本書のような廣範な地域と時代を扱っている場合には情報が整理不十分のまま詰め込まれやすい。本書の記述にもその印象がある。これには本書の分析枠組みの不明確さが關與しているようだ。マカオのポルトガル人の活動を南シナ海世界の中で捉えるという企圖が十分に生きていない。これは例えば、ポルトガル領マカオの歴史的な發展に即した時代區分を採用し、そのなかで終始一貫してマカオのポルトガル人のアジアでの貿易活動を中心に据えて分析する姿勢をとることによりある程度防げるのではないかと思われる。すなわち、本書に取り上げられた史實については、例えば、一七四〇年以前のバタヴィアの中國との關係においてポルトガル人を介した廣東方面との繋がり相重要であったなど、目新しい指摘もあるが、個々の問題については、研究著

積のあるものも多い。例えば、ポルトガルの日本貿易については、高瀬弘一郎氏の研究<sup>(1)</sup>などがある（高瀬氏の見解と本書の見解には相違があるようである）。結果的に、本書が廣範な地域を扱っているためもあり記述が平板になり焦點が散漫になったきらいがある。

このことは以下に述べる第二の點にも關連するのだが、本書の主題の一つであるマカオにおけるポルトガル人の社會生活が浮かび上がっていないという点である。これは本書でほとんど使用されていない中國史料を含めて、史料的な制約がある可能性もあり無理な注文であるとは思いますが、例えばマカオの市參事會の日常的な活動やその運営とそれに攜わった人々の状況についての分析やマカオ在住中國人などとの關係を具體的に明らかにしてほしかった。表題の“Society”のほうにひきつけられた讀者にとっては期待外れに終わるであろう。ポルトガル人とアジア人との關係を扱ったものに例えば、ユアスン (M.N. Pearson) の *Merchants and Rulers in Gujarat* (Berkeley: University of California Press, 1976) (『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者——』生田滋譯、岩波書店、一九八四年) があり、グジャラート商人とポルトガル人の相互依存關係を指摘している。本書においてもマカオにおけるポルトガル人と廣東の中國人や東南アジア各地の商人などとの相互依存關係を指摘している。ピアスンの場合はさらにすずんと、インド史の觀點から中世グジャラート社會の特質の分析に考察を及ぼしている。本書の分析の視點は、前者と異なりヨーロッパの擴張という觀點から論述を行なうとされているが、先に述べたように、今後はピアスンの業績に類するものが、本書を土臺として、マカオを含めて本書に取り上げられた各地におけるポルトガル人の活

動と現地との関連で掘り下げられることを願う。

なお、評者の研究關心から「二三氣」いた点を以下に指摘しておきたい。マニラ貿易などに關してスペイン人の名がでてくるが、今日の一般的な綴字によつていない例がみられる。例をあげると「フィリピン總督 Gómez Pérez Dasmariñas を Gomez Peres Dasmariñas とし」同じく總督 Sebastián Hurtado de Corcuera を Sebastian Hurtado de Corcuera としつゝ、また、著者の不注意と思われるが、「ドミンゴ會の修道士 Diego Aduarte を Diego Aduarte などとしてゐる。また、マニラ・ガレオン貿易での貿易限度額を“situado”とつづき語で表現してゐるが、“permiso”とすべきであり、“situado”の理解に混亂があるように思われる。また、マニラでのパンカダの實施の實態については不明の點も少なくないが、パンカダとは、一般的に、一括取引のことを指すので、六八頁において“sell at retail”としてゐるのには疑問がある。

なお、本書には誤植が見受けられるが、評者の氣づいた範圍でそのいくつかを指摘して参考に供することにした。中でも目立つのは一二三頁のポルトガル領インディアを示した地圖においてフィリピン群島のミンダナオ島が脱落してゐることである。その他、二〇頁「二二行目の shop は文脈からみて ship であらうし」、二二頁「二四行目の disained は disdained」、五四頁「二四行目の 1630 は 1630s」、六〇頁「二〇行目の and は of」、一二六頁「五行目の evaluation は evacuation」、一五四頁「三五行目の Batavia は Manila であらう」。八二頁「二八行目の末から始まる一文中の年代を示す數値には誤りがあるのではないかと思われる。また、一七六頁「二八行目の “were insulating... competition in” は削除すべきものであらう。また

四四頁「一九行目の obtained は obtain」、八九頁「三四行目の VOCD は VOC」、一七七頁「三六行目の Camoria は Comoria」、二二〇頁「三三行目の treaty および二四行目の concentrae はそれぞれ treaty および concentrate の誤りであらう。また二九頁の Macau は表記の統一の點から Macao」、一七八頁の desembargador は desembargador とつゞきつゞきである。その他に異同があるものとして、shahbandar と shabandar、Banjarmasin と Banjarmassin などがある。さらに、reinol の複數形をポルトガル語式で reinois と表記してゐる場合と英語式に reinos としてゐる場合があるが、特にそれが同一頁上に混在してみられる箇所もあり、一考を要するであらう。

最後に、評者の全く個人的な感想で、識者にとつてはいうまでもないことであらうが、それを顧みず述べると、ポルトガルの王室貿易やゴアでの貿易活動は基本的にヨーロッパへのアジア物資の輸出を旨とした東西方向のものであったが、その大きな枠組みのなかでマカオのアジア域内貿易は主に廣東などの中國市場とアジア各地を結び附ける南北方向に行なわれたということを再認識した。

本書のような研究課題を扱うにはヨーロッパやアジアの數か國語に精通してゐる必要性を改めて確認した。著者がその困難を克服して膨大な一次史料を検討され、特にポルトガル語史料に加えて、オランダ語史料を積極的に利用することによつて従來、焦點の當てられることの少なかつたマカオのポルトガ爾民間商人の貿易活動を總合的に取り上げ、オランダやイギリス勢力の伸張とそれへのアジア各地の商人の對應との関連において検討されて、この分野での研究に新たな可能性を提示されたことに敬意を表する。



註

(1) 「マカオ⇨長崎間における委託貿易について——鎖國以前の糸割符との関連において——」(『史學』四九—四、一九八〇年)、同「マカオ⇨長崎間貿易の總取引高・生糸取引

量・生糸價格」(『社會經濟史學』四八—一、一九八二年)などがある。

Cambridge: Cambridge University Press,  
1986, 282pp.